

大兄光陽氏小宮次官夫人、御尊宮對七人、
人、(内斯久四十二人)重なるは侍従院侍從等
爲永同李景熙承府典醫洪萬普等なり

引續るからだうな然し、ながら解氷も近
り進み過した爲に此二月三月中は流れ
放れ駒 去る二十一日午後五時本町
通會派出所の前を一頭の放れ馬が馳せ來れ
るより斯く目見たる巡查はこれを見留め
て持主は何所なりやと思案せる内、駆け
れる一人ありてこの馬は大和町二丁目三十
番地陸軍主計正松原信太郎の飼馬なるが
失念或物事に驚き驚き走り廻りし綱を引き切り
走り走へ因つて其の跡を追ひ難け來れる
趣と見えといへるより其者に引渡されしが馬飼
ふ人は注意すべきことどもなり

●川の蛇死 山口縣熊毛郡下田布施村
平氏目下仁川京町四丁目吉崎彌吉は本月上
旬より老衰病に罹り、就床中なりしが今頃
に至り精神に異状を來し、昨朝自宅軒下に於て
首を絞つて往生せり

●劇社大會 昨春米滿鐵各地を周遊せし
某客伊藤南樹氏は本紙廣告にも見ゆる如く
今同明治町一丁目大和湯石庵に團聚教壇を
設けし又、斯町の開發を期して速成致すべ
しを以て、其拔擢、傍今廿三日十二時より同
館の重もの寄しけるを感じ、初めに幸ひた
日の曜日の晴天ならんは腰の一袋を携へ
る程の時山にもナト早けし獨身者は友を尋
ね居る苦なれば是處會の事ならん

●本日のお暇 陽春三月の候に入らんと
する今日此頃は追々と先づつ日の照しくま
さの退きて小春日和の氣も長閑けくハヤ外
食の重もの寄しけるを感じ、初めに幸ひた
日の曜日の晴天ならんは腰の一袋を携へ
る程の時山にもナト早けし獨身者は友を尋
ね居る苦なれば是處會の事ならん

●中山は漢江の邊りへ城を曳くも一週な
し又夜に入りては本町座に仁和加舞伎振
安息しなれど中に在る某の横着か折り置
もある用を果さん爲め却て終日忙はしま
にて自業自得の結果なれば又某の事情
どういふのやまし

告

齊藤亨太郎

會席御料理
並に仕出し
西小門内
横濱亭

大阪人士に告ぐ
今般有志諸彦の賛成を
て京城大阪人會を設
立致候に付大阪人士は
勿論大阪に縁故を有せらる
人は舊て御入會あらん事
希望致候
規約書は左記役員方に備へ置き有之候間
御入用の方は御取寄の上第一層破下成度候
御勸誘の差出し居るも多數の事に候はば
御談話可有之に付既知の諸彦より御知ら
せの上御入會あらんことを
申込所

京城南大門通二丁目 **三好和商店**
京城本町四丁目 **木島平商店**
幹事 池田長兵衛 同石井新同 三好和三郎
同北川吉三郎 幹事兼會計 木島平兵衛
評議 津邊中齊 三田政次郎 注本嘉三郎
小北米藏 南方寅次郎 野々村藤助
西尾芳松 中村政次郎 中村芳松
保高 德松 山野北松 兒玉善次郎
中西吉 鈴木義三郎

日本郵船株式會社
汽船出帆廣告
貨物及船客取扱店
仁川海運通
京城南大門通
巴商會
電話三〇六六號

釜山長崎間可神戶行
山東丸 二月十五日 後三時出
第一山本浦 釜山、西門、神戶、大阪行
高松丸 二月廿六日 後三時出
高松丸 二月廿六日 後三時出
大連丸 三月五日 後一時出
大連丸 三月五日 後一時出
大連丸 三月十九日 後一時出
大連丸 三月十九日 後一時出
釜山出帆 元山行
釜山丸 二月廿六日 後三時出

法律事務所 京城本町一丁目
電話六二四番
仁川新町一丁目九七番地
電話五二七番

夫人 名 氏 小 宮 次 官 夫 人 御 座 宮 殿 七 十 三
 人 內 解 八 四 十 一 人 重 なる に 侍 從 院 侍 從 奉
 高 水 同 李 景 照 水 事 府 典 典 洪 哲 堂 等 なる
 御 菓 子 製 造 大 勉 強
 一 錢 に 四 つ
 目 丁 町 本 城 京
 堂 八 二

